

## 05 早稲田大学政経学部AO入試全訳

川田先生作成

国際化とは、しばしば、全世界的な西洋化と考えられている。この点では、国際化を支持する人々とそれに反対する人々との間に広く同意がなされているようである。国際化を積極的に考える人々は、国際化というのは世界に対する西洋文明の驚異的な貢献のことであると見做している。彼らの見解はヨーロッパで大いに発展した歴史に対する解釈に基づいている。つまり、まずルネッサンスが訪れ、次いで啓蒙運動と産業革命が、そしてそれら全てが相俟って西洋における生活水準のとてつもない上昇をもたらし、今や、西洋のその目覚ましい業績が世界中に蔓延している——というものである。こういう見解においては、国際化は単に素晴らしいものであるばかりでなく、世界に対する西洋の賜物であるということになる。こういった歴史の見解を支持する人々が当惑を覚えがちなのは、その素晴らしい賜物が西洋以外の諸国によって感謝の念をもって受け入れられずに、災いとして攻撃されるからである。

そういう国際化反対の人々の見地からすると、時として西洋の政治的かつ経済的な支配の長期にわたる歴史とみなされる西洋の影響は、打ち負かさねばならない強力な大敵ということになるのである。その考え方の下では、ヨーロッパや北アメリカの貪欲な西洋諸国によってもたらされた現代資本主義は、世界の貧しい人々にほとんど手を差し伸べることのない貿易と商業の原則を打ち立てたものとされる。宗教や地域性や文化によって説明されるような非西洋諸国のさまざまな独自性を強調することによって、どうしても西洋との角逐の意味合いが増すことになる。

国際化はほんとうに西洋の新たな災いなのであろうか？ 実際のところ、国際化というのは、新しくもなければ、必ずしも西洋ふうでもない。従って、国際化は災いではないのである。何千年にもわたって、旅行や貿易や、知識や知性の拡大（その中には科学技術の拡大も含まれる）によって、国際化は世界の発展に寄与してきた。そういった地球規模の交流は、しばしばさまざまな諸国の発展をもたらしたのである。世界規模の交流は必ずしも西洋の影響の拡大という形を取ってはこなかった。

例えば、千年ほど以前には世界はどういう様相を呈していたかを考えてみよう。およそ紀元1000年ごろ、科学技術や数学の世界的な拡大が旧世界の性質を変革しはじめたのだが、拡大の進む方向は、今日私たちが理解するものとはかなり反対のほうへ向いていた。紀元1000年の世界の先進技術には、紙や、印刷技術や、火薬といったものが含まれていて、その全てが中国で生み出されたものであった。また、それらはほとんど中国以外の国々には知られていなかった。(すなわち)国際化は、そういった先進技術を西洋をはじめとする世界中へ広めたのだった。

もしヨーロッパが当時、数学や科学技術の国際化に抵抗していたら、経済的にも文化的にも科学的にも、はるかに貧困になっていたことは明らかだろう。さて、今日、反対の方向(西洋から東洋へ)ではあるけれども、私たちは同様の法則が働いていることを目のあたりにする。西洋の政治経済的支配を象徴しているからといって科学技術の国際化を拒絶するのは、世界のさまざまな地域から摂取された世界規模の賜物を黙殺することになるだろう。なぜならその賜物こそ、《西洋の》科学技術が発展することを可能にしたからだ。

現代の国際文明は、単なる個別の地域文化の寄せ集めではなく、世界遺産である。国際化を、西洋以外の国々の人たちの思想や信条を支配しようとする西洋の欲求の単なる一例と見做すことは(国際化反対論者がしばしば言うところだが)、重大かつ痛恨の過ちであろう。同様に、もし千年前にヨーロッパ人が東洋の影響に何らかの抵抗をしていたら、これまた重大かつ痛恨の過ちであっただろう。実際、世界中の貧困者が抱えている問題は、彼らが現代の科学技術や、国際貿易の効率や、自由社会で暮らす社会的経済的利点を手に入れられない限り、解決されないのである。

しかし、それと同時に、私たちは国際化がもたらす経済的な得失の配分という全く独立した問題に直面せざるをえない。国際化を支持する人々は、国際交易にあずかるより貧困な人々もほとんどの場合より豊かになる、と主張する。彼らが言うには、貧乏人も利益を被るのだから、国際化というのは公平なものだ、となる。逆に、国際化反対派は、国際化による経済的な利益は主としてすでに富んでいる者のものとなる、と主張する。彼らの言い分では、金持ちはますます裕福になり貧乏人はますます貧乏

になるのだから、国際化は貧乏人にとって不公平なものだ、ということになる。

私見を言わせてもらえば、公平さに関する問題はどちらの見解が正しいかという単純な問いかけでは済まないものである。たとえ国際化を支持する人々が正しくて、貧乏人が多少裕福になるとしても、だからといって、彼らが国際経済関係から生じる多大な利益の正当な分与にあずかっているというわけではない。換言すると、主たる問題は、単に国際化が貧困者の生活を改善するかではなくて、むしろ、私たちがどうやって世界の貧困者の要求にこれまで以上に注目するようなやり方で、経済交易や技術の進歩がもたらす利益を十全に活用できるかである。公平さに対するこのような凝視こそ、いわゆる国際化の動向に対する大きなプラスの要因となる。国際化は強固に守りぬくに値する。しかしながら、改革の必要もあるのである。

# 模範解答

## 問題1 【10点】×2

- (1) ルネッサンスや啓蒙運動や産業革命が西洋における生活水準の急上昇をもたらし、その業績が世界中に蔓延した。従って、国際化は世界に対する西洋の賜物である。

(74字)

- (2) 西洋の支配がもたらした現代資本主義は、世界の貧しい人々を無視する貿易と商業の原則を打ち立てた。従って、国際化は打ち負かさねばならない強力な大敵である。

(75字)

本文を引き合いに出す例年どおりの簡単な問題。できれば満点を取りたい。

## 問題2 【20点】

一致しない。なぜなら元来科学技術の国際化は東洋の中心である中国から西洋に向かって拡大したものであり、その恩恵が西洋で成熟してふたたび非西洋へ再拡大していると筆者は考えるからである。

(90字)

文明（国際化）の波の揺り返しを記述するのがポイント。やはり満点を取りたい。

問題3 【30点】

国際化を守る根拠：国際化を維持しなければ、世界が経済的、文化的、科学的に貧困になること。国際化を変革する根拠：国際交易の利益が貧困者に不利に分配されていること。私見：国際化によって富の平等化や知識の平等化が図られるとするなら、それは人類の究極の目標に近づく素晴らしい営為であり、私は異を唱えるつもりはない。しかし、生活環境とりわけ物質的条件の平等化とは相容れない個別の文化の顕彰という問題が疎かになる。個別文化は歴史の重みを認識する各民族の励みであり、誇りでもある。これを均され、失うことにでもなれば、彼らは生活の精神的地盤を失うだろう。文化の融合や溶解は、単なる上昇志向や模倣の結果もたらされるものではなく、かえって平等化を嫌う個別の特徴が混じり合っこそ昇華するものであり、世界文化の単一な平板化は各民族に誇りを失わせ、精神的な欠如感を引き起こすのではないかと私は危惧する。

(389字)

個々の受験者によって全く解答の仕方が異なってくる問題で、満点は無理。持論の理屈を乱さずに好きなことを書けばよい。三分の一取れば good。

問題4 【30点】

インターネット利用者の割合が低い国は少数の一群を形成していて、たしかにGDPは低い、利用率が高い国ほどGDPが高いという傾向は必ずしも当てはまらず、多数の国で分布がほぼ平均化している。これこそまさに富の不平等のよとの科学文明の平等化であり、精神的個別文化の喪失現象の証左と言える。現代の国際化が後進を先進に高め、交易の在り方や民族の歴史伝承を便利にするものではなく、ただ民族的特徴を科学によって平均化するものならば、私たちは、人間はよき統一とよき平均化を求めるとい一般通念を疑い、悪しき国際化の瑕疵に目を向ける凝視力を獲得しようとするべきであろう。

(276字)

[別解]

インターネット利用者の割合が低い国は少数の一群を形成していて、たしかに GDP は低い、利用率が高い国ほど GDP が高いという傾向は必ずしも当てはまらず、多数の国で分布がほぼ平均化している。これは、国際化が解決すべき主たる問題は富の不平等ではなく、貧困者にも科学文明の賜物を平等に享受させることだとする著者の意見に明るい光を投げかけるものとなっている。しかし、文明の享受に直接結びつくはずの貧富の差に意識を留めず、ひたすら文明を享受する喜びに浸ることを国際化の目標にすれば、富の獲得に基盤を置いて文明が進展する原則が崩れない以上、いつの日か必ず現今の国際化の趨勢に歪みやきしみが生じると私は考える。

(298字)

表を著者の不安（あるいは期待）に重ねて読み取れるかどうかを最大ポイント。読み取れなければアウト。0点が続出するだろう。不出来を気にしなくてよい問題だ。

◎ 総合すると、今年もやはり、35～45点が合格点だろう。